



中村俊定文集

前編

三

中村俊定文庫
文庫 18
263
3



淡々文集卷之三

目録

- 一 仙九帝云満ちる酒は祥
- 二 守氏去学の奥書
- 三 春棠窓の銘
- 四 雑話 十二章
- 五 病中倦夜
- 六 挽詞并秋、をス
- 七 青錦堂の紀并道行
- 八 幸化小を、たる文



文集三目録

九 流斜之人、く手紙

十 其舟より素葉を擲る事

十一 其泉の源を先考依計

遠志のこゝろ

十二 白拍子能信懶

十三 大圭碑文の文

十四 間暇乃とる事

十五 頼光綱子令札を後画の價

十六 松八のきし傳ふ事

十七 檜雪くむ事

十八 武陽渭水へをす

十九 阿保院の画の價

二十 七世孫子孫の修文

二十一 雜話四章 并昔卷

二十二 十七回小絶る事句

二十三 勸學子歌

二十四 奥洞亭小絶る事

二十五 戸田氏三回忌集之序

二十六 妻小おろるる人の許へ了る事

二十七 林外老人へ贈る事

廿八

後東亭

廿九

野人へはふりて

三十

小野天神奉納の跋



第一 佃村九郎云清小禰

酒徳辞

老人あり雲茂幕トバリふし亭雨月をを結し堤
 をカシロ席しそん託を成む。心の如く小朝夕をも
 終る治世の中乃治を託するなり。武功の余光を頂
 き子孫の口ををわくはこた治ううた。年くくけりて
 ちり乃ハ片々り田乃里の暮秋をメて志かを屋に。
 起ると看る。寂ぼんてち又春む。解時ハ川内平吹
 じさむきは静よ益成ひふ。さの清きめくさ家
 獨乃夕アハき如を脱き是ををよして石弘く燈

古記云
 けさたぐ
 指のるく
 五郎書
 佃ツクリタ



驚りよは福く。心知れ人折あへて茶碗を出す。
 此いし紙をとりとよこひ放すかいらを鼓き。
 盃と又六盃をみ流う。強ひこけう。茶をて。神
 風乃いさねよく。曲くぬんう。君子れ道も佛の教
 も。心裏おの流う。佛の心。誠平阿う。こき老
 乃娘ひ

心をやろりあふ志うめやと

おといたま
ほのこて
んをやるふ

雪實うくぬ人のこの素言老人のうへく。劉
 伯倫^{ヤロ}拈を左右の味方と形して狂歌を又看む。
 一人能明白くき来とのふ志く相となた

才二 守武志學之真書

六波羅密寺のむよりよと流き来といふ津あり。常に古
 人乃学れ癖をそえへ世に埋る。古人の巻をある
 けし事。間平後と入る。人以老成稱。本の小
 式紙より平あへるをわく。室ととてある。
 予是後そめえ書一列ととと第ふ。時とと
 今角倉乃文庫ふとゆ。西本のうく。能信のそれ。
 ちりそけり。武士乃心もわく。一物ととと
 才の庵徳く

才三 春崇へ遠く窓の銘

高川北窓下
劇略語

飛簾孔
窓ノ名ナリ

怒放士囊之
口風賊

屋卵窓ハ
屋根ヲ切キ

高川北窓下。自謂義皇上人と。流風の来りて
 嘯きうそひくそ聲拂くそ折ひむ。後人陶窓
 と呼てうやみうやむ。義まさるものたり至る。
 屋上子飛簾孔を正別とす。天地怒る時吹
 草枯葉のゆるかき。地洞石さく如くここ夏の死
 名れ妙くた日も吹。流たけぬる夕暮に吹く。川を渡
 して日高き夏乃氣を正さんと好むとす。そと
 正さんと氣ふとの氣おとへん涼しかり。忽そ夏の
 日乃氣を正し是哉又して夏日子遊ふと名崇之。屋
 卵窓と存居きものを作り日く故人を能く称く

窓ヲ明スラ
刺ニ号ク

この世

涼しさの富貴と来り松乃存

昔了傳り志我幸す

寺四雜話

一蒼顔不文字を教へる。鶴今飛来して一字もよ
 む事あるは別まの邪を正して飛去へ。手録も
 先祖を徳る子なる進く手録れ文字細工を移りて此
 日すすす和漢おとる子の自中を感し墨を成録し
 て道子日我空しく世者八眉を擧めて能事と存之。然
 とも風雅のれをい深うし如人の子記を額すも何也

小もつたなきも也。自悟をいひぬりて、さきさきく、
 身。同以謝、聲、澗、画とすへーなと、いへて、清、輔、も、その、趣、兼
 好も、身、と、拙、な、う、と、は、一、身、と、と、を、事、并、う、と、い、え。
 僧、人、の、身、時、危、す、字、同、お、の、事、少、く、筆、道、咄、の、用、の
 事、と、笑、ふ、事、之、非、也。重、溪、先、生、を、能、書、の、名、有、り、人
 かり、う、事、の、事、う、と、の、を、い、て、今、て、下、れ、名、字、の、後、
 也、又、ま、一、紙、の、傍、紙、を、乃、ん、その、う、へ、一、字、を、を、辭、し、ん、と、か
 も、又、ま、の、道、理、を、一、い、と、を、あ、る、と、さ、る、り、の、明、く、も、有、じ。
 海、聲、澗、を、を、見、て、甚、怒、よ、へ、一、や、大、笑、あ、り、う、。長、夜
 腹、淋、く、厨、飯、あ、り、や、や、不、僕、云、有、り、何、の、業、有、ん、と

阿、六、が、う、云、何、つ、と、阿、六、九、年、母、之、つ、あ、り、と、云、世、を、驚
 け、う、も、お、と、け、う、と、又、大、笑

一、東、坡、の、信、の、子、ま、も、字、達、の、画、一、も、嗜、み、あ、ひ、と、う、と、を

一、光、悦、生、涯、の、心、意、を、た、と、甲、斐、國、山、延、山、長、廊、下、れ、朝、口、の
 額、す、て、お、と、い、志、く、れ、う、通、長、ノ、二、字、あ、り

一、名、ふ、阿、の、進、を、そ、う、や、と、を、進、磨、大、海、す、て、お、り、ま、を
 九、年、面、壁、と、て、名、老、名、僧、和、漢、お、と、も、習、ち、う、海、像、哉
 念、し、う、の、愚、索、大、悟、の、神、九、年、の、月、壁、ふ、む、い、て、尻、を、腐
 ら、一、悟、う、う、ら、と、て、不、慈、用、を、と、た、と、う、九、念、面、壁、如
 死、ん、と、念、一、念、而、悟、如、法、禪、一、二、三、と、念、し、て、二、念、ふ、り、と

と榮華此恒情なり教乃要主也一棧九念して向ふ所ハ
 堅ふても窓あても窓あても栢樹子ても海も山も此れ其
 時の心の的なるをさるる二種の的を捨て教年暗るる衆
 を放されり又昔の衆の像として其の是ふよ衆りたる連
 片月痛きおん柳も其意を孤舟の一名也川上の観念
 深不見性成仁の天國の虚名なるん澤庵も其意を
 憤りて。至處難信とはる者此心甚をうく穢りたるなる
 人古賢禪師海下光也其意を責りてありて其事人
 一昔義士ありて其意の持るる扇として骨を立り掛おしりて
 秘花をうをん信ふおつとの手跡をうて 同く其も絶る

古賢南紀ノ
 人之海印光
 ヲ作

おとひよありまろりともさうさうこれせま何き外その比乃
 日く切もかへた事之切なる心を感へたりなり
 一英一蝶の書くも後水の流るるをこりて大笠ををるるも坊
 と此跡^{ウツキ}取る所の後不賢ををて云人ありて云きハめて柳
 一本す深るんとてて後不賢なりつらなり一見道を道のへふ
 清水流るるの西の流るるの時ふさ事ありて下野必芦
 神と云ふなり今も柳あり古流と云。新柳の時見たりなり
 後不賢と云ふ所の心ハいつも事ありて其意を北平とて土佐家
 へ伝きハされりて。昔杉戸の伝なり捨庵をかきしるる官
 女をす事ありて其意を答ありたりとて此事なりとて

折草あふふ土佐家の若へもたつかさきりつ仍て賢の
 事以アしる事 道の人ほ清水流る柳陰志るりて
 くと立とぬりつ事 獨行潭底影。數息樹邊身
 賈嶋々自愧の句ふけへて道の人の奇と新古今子
 あつ

一つの法ん声神度へあふる女之交仕お依りて
 ことゆゆ申勤て教へゆの時御能ともて具あまてそ
 の方名をとりあふるつ事。やきふを依あうりれを女と
 何んを志ししとてそをたふしおゆめらけおひくきて二年
 とを立とすりつ事とアとるゆを心有るちの女なりりり

一茶をゆとる人云茶ハ二つ置かせておみそいりりふ
 術を盡しても三百番の外なり二つ置ても六百まで
 己先互先を扱つりりりり方量形一思りりりり不倫能事と
 とそかくと一人あり又茶を云て論ある事と世下の事
 一扱扱おまうてお度と誦道と称するのしるふアと
 る人あり當時茶を扱てハ仙ト也是は對するとの
 宗通の能信言名を是は等しとてさねりり仙トお
 扱さても不悦又ねりりりり後もくく其其境の遠
 ひるるる人のなり風雅の上を黑白とちまらふなる
 ことのりありり茶を一人の上をを扱て其其扱て

日更時より本と成りて下下三三と成りて如く
 風雅の後者ましく成たよなるおふあらし一其人を
 壓千人を感てしめてもわう神うさし下子も一歌者
 流をさく上子や遠くをせたりひくして月雪死杜宇
 こと新日みつうう分をを忘るるものなり上子必衆
 口金をさうしけりて下下近しそ道ぬ能してはくはく
 時と牧葉う書したるうく間ふ發や容を白をうち
 黒を退ふるを早し一人なるをさうあまう路ては風雅
 の本さふあらしを神意す叶ひ鬼神を感てしと病
 魔を退き雨を祈る名を以て圖を通り悪夢を払

ふ是等神意す叶ふ成る人し教ら飛子の有無心配
 系子飛子配まてん静之才長態のつうまふあう風雅
 ハ家と氣のかうち小空心有意をむすひつり氣と心は
 たくうひうく掃時を佳句とかり心と氣相和し地
 乃句とぬりの也心小氣の中けうり時をあし佳句とぬ
 也此ふすそふあう相を下子とさへし祿并の舎欲
 せんねんへし是よも上子下子あり
 一昔仙ま屋の大さ上流の時さううの家
 いつし百ふつをみし花のきらしるす
 せんびくうう桶とぢの巻

此一丁一真を古きとあり略す

一 正教ふ子日 桐花胡やめ 七夕 菊主

四君子の星つみと云 侍ると云 花主ぬと云 正
教を月見小なる御城之御能を務る宵の三受小
歳修并也正く委枕上り立せまひ正つみみ
一通り身之裡はあひまるとしてあはれりり感
くして一子も忘るは翌日甚正教を打たれた甚御
機姫すくねひ何と云 正教を君はゆつねと御上意
よてありし時此表書の中ふ年とよをわるとは了上
くく花主と云 之樂座への上役ふ答へたりり

と此此星つみのぬハハハとこつまわると
花主ぬを當とふ了上傳りり一乞ふよりて幸
く家小歳修并也正尊と今とても不絶已徳急
らんととて一君ぬ其重ゆると云 月見と哥
お心をよきしもの之礼教を必風難お心なくして
叶ふよき事也強の文後つりすしては舞
もくもあもくやと形心つらむわんれ
以通知りさる事あまも昔一老人の夜話有
一宰予晝寝子曰朽木不可雕也下器よりと云 後
まされとてさちと云 呵了教りくまわらいつ

世の中もそくくみ侍りき。志ろく阿まやそは。後裡可
一着をぬく

後乃世をかきけりとも一くそ

あゝ娘旅ふし小東の中一山

漏る沈む瀧。障あり絶又聽。東窓未生白。枕上
一灯青。右雲溪先生病中侍疾之吟。時今思云
少ぬ

良薬甲病魔を遁けし時

くし生く何をまき風上世ぞ存

障絶窓志ろく灯空一

才六挽詞羊秋へをス

父存在乃時ハ立子あみねるふ。父ハ徳をつくす
とををあせらん。我孝とをあり。孝子法ハ海はる平ハ
泣きを地ハはるぬき天をあふく。皆是孝子事ツコウ。此一
也。なとて。よのふ子信有ハ常に。て。孝と好く。た
ハ信の智。そ。此。謂のは。一。あ。さ。あり。然る平泣きを。孝由
る。は。信。み。て。其。信。信。ふ。け。く。されハ。又。其。其。謂。ち。ん
や。ど。ま。我。く。た。お。よ。る。を。の。へ。面。な。お。も。に。と。我。解。り
信。を。解。り。そ。る。に。似。たり。只。ん。乃。乃。ふ。ふ。我。常。也。一。と。深
く。それ。人。を。知。り。は。り。く。た。家。を。識。く。と。吾。必。信。あり。と
謂ん

昔本功子橋山と云妓あり。万人肝を縮め朱
唇を竅ふ。とやいり。其重田畫せとも心張カシツ攪
め酒家の一丈千生。涯のふ候子志し。かみ傳く。
或時夫。狐瓦佛。其誘きて。巫電志る。此を發。神被も甚
は。便遠。子刻。みちのく。れ方。あんと。顔。子。身。を。さ。う。積。く。ぬ
秋風もたや吹。さうへく。を。乃。其。の
其。を。室。を。亭。を。志。く。川。の。界

とよみて。とや。く。了。切。拂。ひ。山。林。ぬ。かく。入。る。ふ。
恩乃里人。有。か。く。た。と。い。と。と。く。奴。も。ふ。振。
くれハ

恩ハ流下ニ

其く。歸。る。道。一。ち。り。れ。ハ。山。里。千
そ。み。そ。め。衣。袋。付。妙。歌。も

又

系。け。の。む。り。一。成。今。も。引。く。く
鬼。乃。と。字。く。海。山。と。の。望

鬼。乃。と。字。の。強。奇。ハ。殊。一。一。塔。ウ。独。寂。さ。千。叶
へ。了。奇。の。風。情。ハ。と。ふ。も。か。く。あ。も。真。乃。ん。系。系。成。字。
ね。と。も。さ。や。う。さ。く。う。へ。あ。う。ん。と。感。を。へ。一。好。く
系。竹。の。昔。と。つ。系。を。と。此。不。乃。書。と。な。さん。と。子
さ。う。も。怪。く。以。や。一。み。ん。と。ハ。ふ。の。と。屋。と。う。山。中。輝

きんりきんハ
形迹ナリ 景迹ナリ
ひんりのやうなやい
きんりきんハ
蜂媒 劉後特
蜜口傳未好信通
為花評品級東凡
香鬘粘得花英去
疑是纏頭利市紅

白中僧あり

輓士六昔々
泥定同シ

和章騎馬
似東船

飲中八仙歌

三瓦高舎

妓ノ集ル施
舎ノ水許傳

誦

輓士鉄のこしく歌む。泥定りぢるふ葉ハ船子乗らじ。
沈碎の一書くと結糸ふ。昔今三瓦高舎のな種
まつた松のちうらハ朽くて。又あつとさすきと毎年回
しう〜。口十〜。ふと〜。とらるれと〜。ふれと〜。出
り家とま〜。夜うりとず〜。らま〜。彼柳をう
そ〜。ひり家扱の整りもやう〜。体斗ともま〜。あ〜。いさ
けり〜。い。の。ゆ。り。根。も。と。〜。ふ。り。と。卯。め。花
の。ち。る。れ。古。る。り。ほ。〜。き。波。の。一。白。子。ハ。真。あり。り。り。
涙。の。研。て。と。む。〜。美。を。抱。き。阿。附。〜。下。なら。ぬ。能。強。の

傍り垣根
後、れに懐紙
子名をます
名ヲ漢のミ
〜。〜。也

さぢめい
るメ

達人。今誰をぬら〜。辱んや。時己ふ〜。る泉流きん
よ。春の道を畫〜。して又。新ふ先人ぬら〜。す志〜。ふ
一節。月日の背をとりよ〜。返〜。してあ〜。るを吞。声。を。放
て。さ。ら。め。あ。る。さ。う。ひ。と。を。字。ゆ。け。ま。表。文。の。ち。〜。ま。き
泉

昔誰らん画も回〜むめのり

漱ふれけめき〜。一。白。の。ハ。種。小。品。〜。〜。如。下。如。〜。〜。
も。白。ひ。て。子。種。美。花。を。か。〜。ち。〜。り。〜。〜。い。あ。〜。〜。今。の
お。う。〜。〜。も。事。〜。〜。ら。を。て。ハ。世。の。上。人。の。真。体。も。こ。の
れ。な。う。〜。志。〜。〜。ぬ。花。の。情。紙。〜。〜。ふ。尼。知。り。如。如。〜。〜。花

あ〜。ぬ。花。を
〜。〜。や。〜。〜。め
は。祇。自。畫。畫
〜。〜。奇

心裡吹毛
禪語之

輝光
無極と云ふ
泉ニアル文格ナラニ
終り之

よのへある心むけしを。至って孝行のその紫衣も
耳たやその凝るるを。中しく動るる縁朝夕の心
裏吹毛。常々磨すの一棧高く清く。徒小選タダチヨ—あなが
ちよ柔よ折ひて甚日そ表のねるるな〜ぬき
泉の風流。中ハ環よ白花れ光りを浮へて。孤岡我
破了。皇都を在りよ朽し思也なうく暮秋を厚の
寄りくよもあひ家の日を兼へ。泉源を置てくわ
賓客よ命し。吾小室。霜衣けをけりて。樹よみよ
よ。尖風をそらふの寒泉別甘泉より。輝光眩
耀厥福をくくする。あ〜強く長く極うた〜い。

いづれと云
いづれと云
泉ニアル文格ナラニ

中三白拍子之画讚

源のさねうはら〜へゆあそん〜と〜は〜り〜る〜時〜り〜山
崎〜て〜命〜た〜ん〜ふ〜け〜ふ〜も〜れ〜あ〜は〜と〜よ〜み〜侍〜て〜さ
〜う〜ぬ〜て〜あ〜る〜ハ〜母〜を〜あ〜へ〜
静〜る〜事〜陰〜し〜静〜ま〜か〜ら〜れ〜る〜乃〜也

下ノ白ハ

なれらあうれのうま〜く〜ん 志ろめ奇

中三天主碑前之文

石を切石我運ひ。然却圭子り志家〜を彩り

と古人をよみたり。至福くそ家深く稽古し
神古く人知して年相長く。おかく業ん遊ひ成
存しや百廿余を存せんく也

光五 頼光綱小むらひ金れを以て筆の瀆
細立て鑑ありはさのぬあう也

此法讀千餘
ヨリ流りて
今皆別約月
とあり

とハ。青子まゝの自之は法をいす。二条大文へお
あさる侍

清原人常とあふ山うつ

頼光あつ咲

光十六 権八のきり侍

道人兼元章の筆架成婚。李白三多筆生花
自是才思日進と銘ス。孝是成好く筆の及明
あふ侍り如支。画以名あり。ま時。庵筆筒成はる。一
一。張。こま。取。法。奇。なる。好。ま。好。いと。あ。み。程。と。れ。外
の。傍。珠。を。焼。金。火。紙。照。り。一。ん。ふ。路。と。う。ま。ね。林。成
は。ら。ね。ハ。秋。も。更。好。是。を。愛。ん。ハ。果。人。富。の。た。り
て。世。姑。子。を。所。く。老。の。ま。風。や。ひ。急。り。取。事。に
あ。え。一。様。子。権。八。郎。ハ。奇。矣。如。若。若。人
死。く。急。ふ。麻。も。あ。る。ん。同。の中
み。は。ら。の。銘。を。取。乃。き。ち。こ。あ。て。あ。ふ。た。あ。ひ。く。ハ

と字新あつて歌して。能因はよみたり。国中ききあ
りく却夕此存ふそそ有る

以歌師の坊破笠老人お下あれ

才十七 樽雪へ返事

法号く土つぎ葱湯りふふねを肥る侍細き剣の

山禁是系
梅是兄

黄魯直
へん

本城の脱く逃くも 秘ぬるかき

中長く不用心と下わくある城の字糸と独笑深海

中形トトシ

才十八 武陽滑北の遣ス

東より幸ありと六時く宿所へ一は度万白帆は

る故あくみちさうくと雪か。東福寺塔取乃門ふ

芳く一字あり。是をおきひすそ無くそ智く

聖一と力く屋乃若帆

長く通天橋と能清風をゆさまへう一穴賢と

才十九 阿みの陰翳

山僧の

小山僧部の堂子のわりて。そやれ法とあしとて

光君乃あきさらうゆふらふも只小娘の事を

あきれとすうねも識り始あくねおこり

物ものといふ志しゆるゆゑゆゑににあはれあはれなるなる州しゅう屋や

才さい北きた芭蕉ばしやう多た疎そ之の語ご文ぶん

存ぞん心しん雪せつ兄にいのの句くとと粉こな骨ほね又また章しやう之の中ちゆう一いつ心しん生涯しやうが莊じやう周しゆう可か
上うへふふああらんらん真ま意い盡じんてて不ふ盡じん之の大だい道だう意い何なにとと言いふふ哉や朱しゆ英えい其その文ぶん
其その句く尤なほ真ま確かく世せ道だうのの重じゆう宝ほう才さい時じ庭てい終しゆう人にんとと加かてていいここ
ららとと共とも平へい心しんととんん也や才さい予よ適てき也や

之この文ぶん字じ字じ之の目め下げ旬じゆん平へいてて有ありり

才さい正せい雜ざ話わ

桃もも徑けい口くち
提てい里り之の
後ご庭てい花はなハ
尻しりノの子こ之の

一いつ江かう南なんのの桃もも徑けい口くち近ちか年ねん後ご庭てい花はな盛さか不ふ倍ばいををととりりしし俗俗
をを破やぶるる事こと目め不ふ痛いたくく心こころ子こ母ははかかららにに拍はくちちりり中ちゆう富ふとと云いふふ

男おとこ之の氣き燭しやく暫しばらく時ときをを金かね千せん疋ふたひらのの價あひだをを以もつ春はる霄せうをを壓おさちちりり世世
人ひと書か紙しをを價あひだととしてして五ご廿にじふ者ものをを掃はらふふ半はん法ぽう也や大だい明めい律りつ
云いふふ以もつ陰いん莖けい放はな入いれ人ひと之の糞ふん門かど者ものハハ杖しやく一いつ百ひゃく

此この刑けいノの放はなノの字じ行ぎやう要やうなりなりととをを放はなととはは可か可か也や
云いふふ事こと可か理り業ぎやうををすすれれハハ杖しやく一いつ百ひゃくととのの義ぎ志しととれれとと
おお射したたんん杖しやく不ふ及たげげ情じやうむむへへ一いつ放はなのの字じとと下げ
古こ事こと暫しばらく時とき千せん疋ふたひらとと具ぐ圓えん不ふ投な者もの必かならず杖しやく一いつ千せん道だう
妻つまとと遊あそ道だうとといいふふ情じやうむむへへありあり

一いつ平へい先せん年ねん未まあありり名なウウ崎さきとと云いふふ死し小こおおんんてていいふふ事ことあありり是こゝ處こゝのの御ご意い也や一いつ死してて後ご必かならず一いつ家けのの者ものとと云いふふ事こととと御ご

燕、
各毒、各
時、
對、

たアまををやうりだのみまうるといふ事の口だみと
と向へんがもれこまをぬ也。不のぬなうといひ咲て別死
いふ事事口く小酒行き去御方へお話笑後の折
ア上り進ん極て一家子口説あんまの上理の埋れるな
ん。とやう御志を流らまう家ん。口古きけて一家和て
むつやううううその後又笑談ア傳りりれて早ぬな
らも残りあけもせまう。やあうう。不のぬまうある
時を能く切字之。人お死、其言也。東坡の燕、張建
對が時、是はハ方うん

一言所西谷ふ入て熱坂長範甚社の宝を奪ふの扱。扱
多の盜賊をぬつてまう。長範いう、おとひらん橋下
岩上よ体きて御山の靈妙の光を感しうん。寺子入て
黄金を指さうて四面を拜ス其比は茶石指言ひ云承
賊徒此御山入いぬ。没後く御供養方と志めやう子
と後櫃を借つて向ふ齒二枚うさうて。生か死後のねとひ出
唯今うらまをせうん

たうの山まの如くはうくをこのんを御ま後れ
強盜長範とせうくを。又うも悟らういす。やも和歌
うてそ海む園なうう

吾々

春一夜涼よいのちまねん神必其痛ハのりぬ
る古今其例多し。市時叢句不怪む人。自他禱
あり。去推る而己。跡へき縁なれを異ともし。小松小

遠うしぬ家むしうとに息しきよ

春をいひのけり涙落るととてりもき

才三十七回忌よ帰るなま句

秀遠の姉一先考十七回忌遠忌を物カて法吟
のこけ涼よ月夜をぬるゆ洞涼一白を輝る

春の日はよきも伴縁の右左

才三勸進子歌

一朔雪路果然として下るハ松疎危古く秋
なりうら。ゆりすをあるも。節を幸て神の
仰の山流流れ林をえんすてけあり

暈ハナシて云通よ家て書を賞へ。世に富むとも。良田を
買て用る事あり。神。句中あり。千鐘ありん。貴
ハまことの富之志ハあれと

ふし書ありて飛苑此橋何ら

首孝保正一書書三月仲院

御照又

才四真洞亭小遊ふとて家

眞樂
濠梁ハ
莊子秋水篇

元文二年十一月十日余。高岡氏後苑の楓葉ふら
りく。錦の屑を拾ひ。人々くおす。いほさうべ
海に群鳥。日暮。地波を洗ひ。そは
うせとなく。歌り。流さる。まみち。葉。か。川。や
か。瀬。あ。み。も。澄。く。そ。わ。り。眞。う。か。も。眞。の。い。む。濠。梁。今
あ。る。あ。も。小。流。る。を。お。流。さ。る。也。御。製。も。今。更
あ。り。う。思。お。お。は。は。妙。や。き。う。歌。り。て。流。お。り。打。さ
る。雨。の。あ。り。流。す。軽。く。二。三。度。斗。り。あ。く。あ。り。て。反。照
あ。ま。り。く。あ。え。ま。り。う。り。新。儀。古。き。拍。浪。す。ま。か。り。さ
ふ。似。の。ら。ひ。ん。あ。ま。り。人。も。ん。き。と。や。や。也。此。時。一。般。流。さ。る。味

新らう、初
比小所お
中院内府云
下署

五常樂

いへもあ。本。ぬ。う。柱。海。と。は。せ。く。山。は。さ。う。一。簣
切。尺。ふ。み。ち。て。ゆ。さ。も。遠。く。原。と。も。あ。ぬ。る。也。い。ま
う。は。あ。り。流。さ。る。あ。ま。り。也。由。此。名。流。の。流。滴。を。あ。げ。て。せ
ま。下。流。海。一。も。ぬ。さ。も。は。と。も。い。昔。め。さ。る。也。樂ハ充表
子。池。上。高。岡。子。遊。び。ま。り。又。の
常。の。い。へ。さ。う。平。河。河。う。て。庭。の。花。ハ。下。越。ふ。さ
ふ。ま。り。う。は。や。も。あ。り。む。一。聲。あ。ひ。て。感。音。集。あ。り
笛。吹。あ。り。と。も。あ。り。一。か。く。あ。り。ハ。蕭。を。吹。き。志。こ。り。て。藤
虫。の。さ。る。を。い。む。南。ハ。和。光。梵。宇。は。鐘。声。時。々。持。功
は。せ。く。い。ま。も。あ。り。也。深。子。六。時。堂。の。さ。り。ま。空。を。通

梵山ハ
阿保院ハ也

ひらる。西よき建つまきき家梅くふめう。た住長こと
めくく上久くれ。くくなくね雪が咲き下がりくさる。ま
お井乃夕暮いうてそくふはせ

上畧
あまをこほま
子らの暖
激事記

ふれとて我ふ布して朝乃時ふうぬ
旅紫の菊乃に世界なりくう

才廿五 紀別戸田何某三回之一集

後疑^ヌ指^シ示^ス
切^キ八^ハ人^ニ
蕭相國
世家

又本古右乃暮秋花咲実たりしも世の飛人のふ月の
雪いささひみりけてほるの影をし。有日月の三秋もほ
くま。おとよ平な疑して折^ヌ示^ス項^ノ人^ノありとはは平る人の
考ありくうん

ソニニカ
一二

面上三年土
ま此州又生
老杜

一二あり秋の存草乃花
面上三年土。秋風又白ひをくむ家山。里芳かこ人
ちうん

才廿六 書あふたなくまらる人のまこくアま

いみ秋のほめ我筆筆常き乃るふりふりうんか
く又恒ありた。いそくといひをそあつるふとみ
の事たむまふ。九月十三日とのふ平そ又はるまらる。
お道る跡の忘りく短きもの方へははるくア乃
屋てゆくれとあくてまふ。子孫在中おもきくわかく
まのけたるむのまうふ。なまかう限してゆきらし

け。ん。い。ひ。包。て。新。音。の。う。を。も。く。ま。ら。く。水。一。言
 二。言。佛。の。心。も。海。の。心。も。ふ。そ。の。う。に。一。り。の。あ。ら。は。な。ま。を
 を。折。り。も。我。撞。め。く。人。笑。ひ。草。も。い。う。め。と。花。の。思。を
 あ。ら。う。い。ま。ッ。日。も。月。敷。ま。ま。う。う。ね。さ。う。き。む。つ。き。け。し。め
 我。れ。自。然。を。如。く。て。誰。か。一。の。道。ハ。志。あ。く。然。る。才。の
 程。み。も。ま。い。こ。ず。い。べ。き。物。の。人。あ。み。た。う。程。と。也。今。の。ふ
 お。と。い。ひ。乃。孝。義。み。つ。う。む。ま。い。く。目。を。と。ぢ。能。く
 耳。小。傍。を。作。ら。し。よ。あ。る。事。あ。一。げ。う。ぬ。る。き。く。蟬。乃
 羽。の。う。う。た。く。落。き。濃。た。い。と。お。と。い。ひ。落。し。て。せ。あ。て

旅中
 去陽
 不意

子。と。い。ふ。も。あ。た。さ。成。力。あ。と。揮。流。に。信。も。境。界。不
 法。者。を。掃。く。あ。ら。ま。や。よ。一。や。う。一。登。り。申。子。落。家
 と。別。う。ハ。一。を。る。家。を。子。乃。ま。と。子。を。離。し。て。あ。く。な。空
 う。ん。ハ。我。を。ふ。う。か。ん。あ。な。弁。乃。花。の。洞。と。志。う。み。て
 神。言。乃。曉。ハ。信。を。う。一。さ。う。さ。も。又。来。る。愛。を。あ。の。ま
 み。人。を。あ。一。人。ハ。う。う。う。信。は。世。境。ふ。あ。ら。う。人。あ。ら
 は。い。信。神。計。よ。ま。ま。わ。ん。と。夜。そ。ん。た。う。き。み。ハ。人。の。う
 き。と。引。信。を。お。知。可。孝。の。書。ハ。か。く。空。を。あ
 と。香。編。庵。を。と。志。う。せ。う。ふ。せん。と。ま。げ。く。て。路。を。た
 信。る。子。也。神。え。ん。今。ふ。う。ん。と。を。み。う。て。信。は

消

一奇の心。はことぬらうく神心うけ引る。あふ
 きふにせはまうくたて。たふつゝ神心よあふへ家平
 好まう洞妙如と。あふあふるもいひと人あひむきひて
 如。あふ孤灯ふりて信の立派も自まうく。指節て
 疎く若来しきふみを流しうく。あふて。あふと
 くあふせし事の中く指さるうく。あふこれとあふ
 竹面同あふも

あふ平克てあふひくは花松楸

吾を云ひ
 人を此心
 活潑其性
 をあふ
 後實又まう
 一格あふ

然を之療しむる平匡あふ。我う一家の要を便く
 風を起しあふあふのくふ。あふあふはて地のくハあふ。日

ハ生キ。月死ス。あふその人のうくあふ

あふ七 林外老人の贈る

茶室因本林外老人。あふ茶室遊て至精至好人く
 茶座を設く。あふ此年六十之賀あふ。あふあふをあふ
 平。別後六十六

亀乃もあふ引もあふ井の水如春

あふ八 後東亭 泉境只情別業之
 瀆亭也

後京極秋風もあふ日の空もあふのねとあふあふはあふ
 うあふあふあふ。あふあふ西の海をあふあふあふあふ
 くあふあふあふあふ。あふあふあふのあふあふあふあふ

講ノ御靈ハ
伊弉諾之御
事里至吉云
道返大神ハ
泉門小塞ま
才大神也
横原也

こく。議のみて彼の^前を^馳追ふ事多し。以て^信如以^信是れ
る風の^信摩汚^信成^信死^信せ。い^信ふも^信す^信く^信あ^信ら^信し。南と^信指
才大神也

て。二^信夜^信三^信声^信肩^信を^信供^信ま^信さ^信す^信。海^信う^信ち^信て。共^信平^信一^信可^信不^信
必^信や^信い^信ひ^信弦^信ひ^信て。子^信代^信と^信答^信ふ^信。げ^信時^信風^信と^信千^信景^信。暫^信く^信破^信
きとハ
急度也

らるべし。道返の大神。さ^信や^信。心^信を^信定^信神^信ん^信。於^信是^信禹^信也^信。唯^信確^信
島也臨崖之
車陸をひ
海賊

各^信入^信舟^信を^信ぬ^信う^信つ^信。死^信愛^信し^信。朝^信日^信を^信お^信り^信て^信。見^信神^信を^信了^信ん^信
あ^信は^信其^信事^信の^信首^信。於^信此^信の^信今^信平^信や^信。海^信也^信。其^信時^信危^信信^信風^信

玄虚ハ海ノ
興ノ作者名

を^信賞^信て^信玄^信虚^信う^信よ^信の^信を^信不^信感^信ん^信。於^信是^信子^信孫^信ふ^信。其^信の^信
危^信う^信存^信り^信ハ^信暫^信時^信危^信あり^信。操^信觚^信子^信を^信握^信一^信時^信小^信
四^信時^信の^信勢^信を^信以^信て^信。嘯^信て^信重^信霧^信して^信外^信ス

其^信う^信く^信名^信大^信軍^信守^信護^信ま^信へ^信。一^信家^信安^信幸^信常^信ふ^信あ^信ん^信
破^信危^信久^信た^信事^信と^信東^信之^信揚^信江^信之^信

之^信免^信保^信成^信希^信子^信文^信下^信流^信
才^信九^信門^信生^信死^信人^信句^信有^信
夕^信立^信乃^信而^信と^信君^信子^信の^信い^信う^信り^信。如^信那^信
君^信子^信乃^信過^信日^信月^信乃^信融^信の^信こ^信。一^信民^信皆^信之^信成^信ん^信る

雨指と云ハ
幽林五ノ記
アリ

を更らふ及く民皆去る我乃く雷走り雨
まろく人を撓む。有なくも縮。去るちり
乃雲。山く我築く。人皆心我洗ひ清味をおめ
借の神かさ麻子うり。強士ハゆり。其
あゝあ収能演も海をり。布不別る漢商
も茹子毛百合も竹も。川床の皓菌本のふ第へ
水橋の柳変態遠みゆき。我僕尻を高く低
く休めひく。到標干の滯^{シキ}に波をぬききそ
く。後を休る。空室ハ借の鳥は白へをねらう。らね
空しく反照甚志風のせぬ責を配る。一句を終りて。

吉城皓菌
在樓和と云
下く休延
をを神
菜花物語

きりち子而あつ。晴く曇く怒の字そく。此字
功ああ。されく。鬼言杜宇の句。写の字我目あふ
矢ひ別求く。ぬりた志け山の志けををり。上粟より。き
よのけ及の中。只又予自暴自弃の人を憎む。仍て此
句をおく。とあれ。え。建家。句。ふ。な。つ。う。を。下。り。子。あ。は。し。

才三十一 小野天神を納く 紀府

一軸く乳之綿城下之人。岡次高去。諸名。皓。盤
逢久。信心。ち。ま。る。く。上。新。可。家。作。方。信。其。之。子
就中。黄。靈。之。御。神。德。常。小。感。一。を。は。ひ。ぬ。岡。次
淡く。紀。府。子。信。宿。一。て。安。三。之。西。君。く。句。を。乞。を。

了て合きて三吟く奇伝と云は是を放てハ六儀の風頌
言月花鳥別神惠ふ叶ひ。神慮別六合り彌
らん是哉まきく退て細めなり一平一原く松の標
たの事をもしつゝめぬ

右全篇門人 州々庵雪川 模寫之

淡々文集卷三終

凡そ宿、寄、存、憐、子、一、り
四、時、の、飛、鐘、を、も、る、本
文、殊、文、素、本、教、旨、何、也
其、時、乞、一、彫、る、去、秋
子、り、了、る、刻、高、白、く、る、原

くぬきしんり川かき
雨土花の海草に凡
徳すききり一りの
多むむむむむむ
舟のむむむむむむ

一
徳

五
徳

鳥
林

友

文
集
友

〇
二

文貨堂誄諧書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同 後編

嗣出

同 藪句集

全

行脚集東東龜

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時菴高判拔書

近刻

寛保二年歳次壬戌十一月望

浪速書肆

梁瀬傳兵衛藏版

心斎橋筋北久太郎町南江入

